

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月15日現在

機関番号：84604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720293

研究課題名（和文）オセアニア島嶼環境へのラピタ人の適応戦略を探る先史学的研究

研究課題名（英文）Lapita adaptation strategies to island environment in Oceania: a prehistoric study

研究代表者

石村 智（ISHIMURA TOMO）

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 企画調整部 研究員

研究者番号：60435906

研究成果の概要（和文）：本研究では、人類史上初めて太平洋の島嶼域に植民したラピタ人が、オセアニアの海洋環境にいかに対応を果たしたか、という問題について、考古学的なデータのみならず、民族考古学的手法によって収集した現在のオセアニア地域の伝統的村落の景観に関するデータも比較検討することで、明らかにしようと試みた。考古学的には、動植物遺存体や過去の地形といった環境考古学的データを収集した。民族考古学的には、現在の集落周辺の陸上および海上の景観や環境に関するデータを収集した。そしてこれらのデータを比較検討し、ヒトと環境の相互関係を理解するための通時モデルを構築した。

研究成果の概要（英文）：In this study I explored adaptation strategies of the Lapita peoples, the first human group that colonized in the islands region of the Pacific, to maritime environment in Oceania, examining not only archaeological data but also present landscape of traditional settlement in Oceania by ethno-archaeological approach. In the archaeological study, I collected the data of environmental archaeology such as faunal and floral remains and ancient topography. In the ethno-archaeological study, I collected the data of environment and landscape of the land and the sea around some traditional settlements. Finally I synthesize these data above in order to establish a diachronic model for understanding the relation between human and environment.

交付決定額

（金額単位：円）

|        | 直接経費      | 間接経費      | 合計        |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 2009年度 | 1,200,000 | 360,000   | 1,560,000 |
| 2010年度 | 1,400,000 | 420,000   | 1,820,000 |
| 2011年度 | 1,000,000 | 300,000   | 1,300,000 |
| 年度     |           |           |           |
| 年度     |           |           |           |
| 総計     | 3,600,000 | 1,080,000 | 4,680,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、考古学

キーワード：オセアニア・ラピタ・考古学・環境・景観

## 1. 研究開始当初の背景

ラピタ人は、人類史上初めてオセアニアの島嶼環境に拡散・適応した集団である。島嶼環境における資源環境は非常に限定的であり、それを有効に活用するための適応戦略が

確立されていない限り、人類の生存は困難であったと推定されている。ラピタ人の研究が始まって半世紀あまりの年月が経ち、これまでラピタ遺跡の年代やラピタ土器をはじめとする遺物についての研究はある程度蓄積

したが、ラピタ人の資源利用についての研究にはまだまだ克服すべき課題が多い。これまで貝塚の発掘などから得られた動物遺存体の分析を通じて、ラピタ人の海洋資源の利用の様相はある程度判明してきた。しかしながら、ラピタ人は海洋民であると同時に栽培農耕民でもあり、タロイモ・ヤムイモなどの根菜やバナナ・ココヤシ・パンノキなどの有用植物を人為的に導入し、栽培していたのに加え、ブタ・イヌ・ニワトリなどの家畜を飼育していたと想定されている。しかしながらそうした資料は遺跡から回収することが難しく、まだわかっていないことが多いのも事実である。そのため、包括的なラピタ人の資源利用のモデルを構築することが期待されている。

## 2. 研究の目的

そこで本研究では、陸と海を包括したラピタ人の資源利用モデルを構築し、ラピタ人の適応戦略を評価することを目的とする。しかし栽培農耕に関するデータは考古学的に認識しにくいので、考古学的手法のみでこの課題にあたるのは困難である。そこで、現在のオセアニア地域の伝統的集落における景観に関連するデータを民族考古学的アプローチにより収集し、比較検討をおこなうことで、人類と環境の相互関係を理解するための通時モデルの構築を試みることにする。

## 3. 研究の方法

研究の方法は大きく2つに分かれる。

ひとつは先史考古学的アプローチで、これまでのラピタ遺跡の発掘調査から得られたデータ、特に環境考古学的データを収集し、総合化をおこなう。これまで貝塚出土の貝類・魚類などの動物遺存体のデータは比較的蓄積が進んでおり、その収集をおこなった。また近年では、いくつかの遺跡において水漬状態の植物遺存体も回収されており、そうしたデータも収集した。さらに最近では、土壌や石器に付着した残留デンプンの分析から、栽培されていた根菜の種類についてもある程度鑑定することが可能となっており、そうしたデータの収集をおこなった。さらに、ラピタ人の古人骨から抽出されたコラーゲンの安定同位体を分析することで、その人物が生前、どのような食物を摂取していたかをある程度推定することが可能であり、そうしたデータも収集した。さらに、遺跡周辺の景観・環境についてのデータの収集もおこなった。特に遺跡周辺の可耕地の有無やアクセス性、さらに海洋資源へのアクセス性についてのデータを収集した。

もうひとつは民族考古学的アプローチで、現在の伝統的集落の周囲の景観および環境に関するデータを収集し、先史時代の集落を

理解するための比較研究をおこなった。例えば、村落内外における有用植物の分布を調べ、その利用状況についての調査をおこなった。有用植物はバナナ・ココヤシ・パンノキといった食料として重要なものだけでなく、パンダナス・モクマオウ・ハイビスカス・ノニといった、道具を作る材料になったり、薬用として用いられるものもあり、人類の適応に重要な役割を果たしたと考えられる。こうした植物の多くは先史時代に人類により導入され、利用されてきたと推定されるが、遺跡からその証拠を得るのは困難である。そのため、現在の伝統的集落の景観・環境をもとに、先史時代の集落のそれを復元的に理解することとした。またこうした陸上の景観・環境に加え、海上における景観・環境のデータも併せて収集した。ラピタ人にとって海洋資源は非常に重要であり、またカヌーによる礁湖から外洋へのアクセス性も集落を選択する上で重視されたと推定される。そこで、カヌーや小型のボートを利用して、実際に集落周辺の海上の景観・環境に関連するデータを収集した。

上記の2つのアプローチによって収集されたデータをもとに、島嶼環境における人類と環境の相互関係を理解するためのモデルの構築を試みた。もちろん、先史時代のラピタ人の集落と、現在の伝統的集落とは、時代も生活様式も異なるため同一ではありえない。そのため、先史時代から今日に至る環境の歴史的变化（例えば土壌流出・海洋資源の減少・海岸線の変化など）を考慮した通時モデルを構築し、提示することとした。

## 4. 研究成果

本研究では、特にラピタ人が拡散した地域の中でも最前線に位置づけられるフィジー・トンガ・サモア地域を対象とし、先史考古学データおよび民族考古学データの収集をおこなった。また必要に応じて、ニューギニア・ソロモン諸島・バヌアツ・ニューカレドニアといったラピタ遺跡が分布する周辺地域、およびオーストロネシア語族が拡散した太平洋の他の地域（台湾・フィリピン・パラオ・ミクロネシア・ハワイ・ニュージーランドなど）においても現地調査およびデータの収集をおこなった。

先史考古学的データのうち、環境考古学的データなどについては、先行研究による発掘報告書などからデータを収集した。遺跡周辺の景観・環境についてのデータは現地調査によって収集した。具体的には、フィジーのボウレフ遺跡・シンガトカ遺跡（ビチレブ島）、トンガのヌクレカ遺跡（トンガタブ島）・トンゴレカ遺跡（ハアパイ諸島）、サモアのムリファヌア遺跡（ウポル島）といったラピタ遺跡の景観・環境データの収集をおこない、

可耕地や海洋資源へのアクセス性などの評価をおこなった。これらのデータの分析の結果、ラピタ遺跡は海洋資源へのアクセスを重視した立地にあり、必ずしも遺跡周辺に十分な可耕地が存在しない場合も多いことが明らかになった。

民族考古学的データにおいては、現在の伝統的集落の周辺の景観・環境データ、特に有用植物の分布および集落に近い海域の景観・環境データを現地調査によって収集した。具体的には、フィジーのバブ村・ボツア村・ナバラ村（ビチレブ島）、トンガのホロベカ村（ハアパイ諸島）、サモアのマノノ島・アポリマ島において現地調査を実施した。これらのデータの分析の結果、現在の伝統的集落は必ずしも海洋資源へのアクセスを重視した立地にあるわけではなく、内陸に立地するものも少なくないことが明らかになった。また、様々な有用植物が集落の内外に分布することが確認できたが、集落の内外においてその分布の様相に差があることが明らかになった。具体的には、タロイモ・ヤマイモなどの根菜やココヤシはプランテーション内にまとめて栽培され、それらは集落に隣接するかある程度離れた場所に置かれるのに対し、パンノキ（食用・木材）やノニ（薬用）といった有用植物は集落内のそれぞれの世帯ごとに所有されているという対比をみとめることができた。またパンダナス・ハイビスカス・モクマオウといった有用植物は屋敷地の生垣や街路樹としても利用され、集落の景観を構成する一要素になっていることも確認できた。

最終的にはこれらのデータを総合し、人類と環境の相互関係を理解するための通時モデルの構築を試みた。それによると、通時的には海岸部から内陸部への居住分布の拡大がみとめられるものの、集落の立地を決定する第一の要因は多様な資源へのアクセス性にあると評価することができる。先史時代においても現在の伝統的集落においても、必ずしも可耕地へのアクセス性はもっとも優先されるものではなく、しばしば広い可耕地から離れた場所に立地している。このことは逆にいうと、タロイモ・ヤマイモなどのモノカルチャーを志向しない生業のあり方をうかがうことができる。これは他の文明における農業のあり方、例えばメソポタミアにおけるコムギ栽培や東アジア地域における稲作のような単一の栽培種への過度な依存というあり方とは異なっており、むしろ多様な資源を利用することを志向している。

また資源利用は単に食料獲得に限られるものではない。例えばパンノキはその果実が食料として利用される以外に、その材木はカヌーの船体として利用される。またパンダナスの葉は蓆などの編み物に利用されるが、

カヌーの帆を作る重要な素材でもある。さらにハイビスカスの繊維は縄を作るための素材であり、ハイビスカス製の縄はカヌーの部材を結合したり、帆を張ったりするのに欠かせないものである。このようにカヌーの製作ひとつとってみても、食用以外の有用植物の存在が欠かせないことがわかる。カヌーは先史時代においても、ラピタ人が海洋資源を獲得したり、別な島へ植民するのに不可欠なものであり、当然ラピタ人はその製作に必要な有用植物の栽培をおこなっていったことが想定される。こうしたことは、これまでオセアニア考古学のなかではあまり考慮されることがなかった。しかし本研究において先史考古学と民族考古学的の両方の側面から見ることで、こうした有用植物の存在が重要であることを指摘することができた。

このように多様な資源利用のあり方が、島嶼環境への適応に有利であった可能性が高い。今後はこうした資源利用のあり方が、世界の他の地域の事例（例えば北海道のアイヌ文化や先史時代の日本列島の縄文文化など）と対比することができるか比較研究をおこない、より人類史的に一般化したモデルへと洗練していくことを目指すこととしたい。



写真1 フィジー・ナバラ村の景観。植物素材による伝統的な家屋が特徴的。



写真2 トンガ・ホロベカ村における樹皮布製作の様子。樹皮布はカジノキの樹皮から作られるが、現在でもそのためにカジノキは集落の近くで栽培されている。



写真 3 サモア・アポリマ村における土地利用の様相。ココヤシの木の下にはタロイモの小耕地（パッチ）が営まれている。



写真 4・5 ニュージーランド・オークランド博物館所蔵のソロモン諸島ティコピア島のアウトリガー・カヌーの全体の様子（上）と、アウトリガーのペグ（腕木と浮木の接合部）の拡大写真（下）。ペグの部分はハイビスカス製の縄でたくみに結合されていることがわかる。このようなカヌーの素材となる有用植物の重要性について、これまで考古学のなかで注目されることは少なかった。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

- ①石村 智（2013 予定）「海洋適応の観点から見たラピタ人の拡散」『古代文化』64-4：

ページ数未定（査読あり）

- ②石村 智（2011）「ラピタ人の起源とオーストロネシア語族の拡散」『史林』94-1：5-37 頁（査読あり）

- ③後藤 明・石村 智（2011）「ショーテン諸島のアウトリガー・カヌー：南山大学人類学博物館および沖縄海洋博公園海洋文化館の資料紹介」『南山大学人類学博物館紀要』29：39-56 頁（査読なし）

- ④石村 智（2010）「聖俗二重王権の構造」『考古学研究』57-3：37-49 頁（査読あり）

- ⑤石村 智（2010）「五 オーストラリア・オセアニアの旧石器文化」稲田孝司・佐藤宏之編『講座日本の考古学 2 旧石器時代（下）』561-582 頁、青木書店（査読なし）

- ⑥石村 智（2009）「コラム ラピタ土器」吉岡政徳監修『オセアニア学』101-103 頁、京都大学学術出版会（査読なし）

〔学会発表〕（計 5 件）

- ①石村 智（2012.04.29）「海洋適応の観点から見たラピタ人の拡散」第 222 回近江貝塚研究会、滋賀

- ②石村 智・秦 玲子（2010.11.20）「サンゴ礁のキッチン・ガーデン：オセアニアの伝統的集落における有用植物の分布調査」第 14 回動物考古学研究集会、名古屋

- ③石村 智（2010.04.18）「聖俗二重王権の構造：西ポリネシア・トンガの事例」考古学研究集会第 56 回研究集会、岡山

- ④ Tomo Ishimura（2009.12.05）Loss of pottery in Okinawa and Oceania. 19<sup>th</sup> Indo-Pacific Prehistory Association Congress, Hanoi, Viet Nam.

- ⑤石村 智（2009.10.04）「砂州に生きる：ラピタ人による海洋適応の評価」第 63 回日本人類学会大会、東京

〔図書〕（計 1 件）

- ①石村 智（2011）『ラピタ人の考古学』溪水社、全 262 頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

石村 智（ISHIMURA TOMO）

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 企画調整部 研究員

研究者番号：60435906

### (2) 研究分担者 なし

### (3) 連携研究者 なし